Analecta Indica

松村　恒

平成17年度に大妻学院から許可されたスタディリーヴの後半（10月～翌3月）はアフメーダバードの L.D.研究所に籍を置いて、もっぱらジャイナ教文献の解読に終始した。ジャイナ教文献の入手が必ずしも容易でないこともさることながら、こうした文献の読解はあわただしい日常の合間をぬってすることが困難であり、静かな環境のもとでないとなかなか遂行できない。こうした機会を与えて下さった大妻学院と不在による不都合を克服された同大比較文化学部、並びにL.D.研究所所長のジテーンドラ・B・シャー博士を初めとする同研究所のインド古典に通暁した諸先生、及び万事にわたり御高配を忝なくしたグジャラート大学のディナナート・シャルマ博士には限りない感謝を捧げたい。以下の小文中には、滞印中の作業の成果の一部が含まれており、これをもって報告の一環としたい。

［略号］ AnalInd = Analecta Indica. Fs = Festschrift. KSch = Kleine Schriften.

XLIII.　ヤコービ選文集の出所について

ヨーロッパでジャイナ学が勃興した当時はまだジャイナ教文献の基本的な刊本が殆ど出ておらず、初期の学者は写本によって研究をしなくてはならなかった。(1) そうした状況の中で数々の業績を挙げたヘルマン・ヤコービは、ジャイナ教聖典の註釈文献中に伝えられる物語を選定して校訂した本文を提供し、語彙集を添え、序文中に当該言語であるマハーラーシュトラ語の略文法を記述した。

Hermann Jacobi, *Ausgewählte Erzählungen in Mâhârâshṭrî: Zur Einführung in das Studium des Prâkṛit.* Leipzig: S. Hirzel, 1886; Nachdr. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1967.

本書は同時代に現れたピシェルのプラークリット語文法と並んでプラークリットの学徒が必ず参照するものとなったが、ピシェルの書が専門家向けの標準的な参照文法であるのに対し、ヤコービのものは初学者に対する入門書としての役割も果たした。従ってこちらの方がより多くの読者を獲得したかと思われるが、入門段階を終了したからといって書架に戻されるものではなかった。プラークリット語の物語研究者は同書を一次資料として、これに基づいて研究を展開したのである。それには事情があった。ヤコービが同書を編纂した段階よりも後になって、すなわち二十世紀の前半を迎えると、インドで続々とジャイナ教の基本文献が刊行され始めたのである。これによりヨーロッパにおけるジャイナ教研究の曙時代の苦難

的状況は解消されたかに見えたが、刊行されたものが批判的校訂本ではなかったこと、また発行部数が僅少のためにインド外の研究機関に必ずしも充分に行き渡らなかったことがある。そのため依然としてヤコービが抜粋の基とした文献を容易に見ることができなかった。これはパーリ語のものがヨーロッパ版もオリエンタル版も容易に参照可能であったのと相当に対照的である。従って一部の例外を除いて、抜粋の基になった文献の全貌を見ることなく、ヤコービの選文に基づいての研究を余儀なくされたのである。また更に不利な状況を創り出したことは、ヤコービの用いた写本は目録化される以前のものであったため、ヤコービは序文に出所への言及はあるものの、抜粋されたテクストがどの文献のどういう位置にあるのかは明瞭な形では記されなかった。

ヤコービの業績を受けてジョン・ジェイコブ・マイヤーがその選文集のテクスト部を英訳したことにより、(2) ジャイナ教研究の範囲を超えて更に広く知られることになったが、一部の専門家を除き、オリジナルの文献的知識はそれでもなお不十分であった。

今日事情は少しずつ変わってきてはいるものの、聖典の古註釈に関しては、仏教の大蔵経の参照のし易さに比べれば、依然として困難が横たわっている。ヤコービが抜粋したものはジャイナ教徒が伝承してきた膨大な物語文学群のほんの一部に過ぎないが、今日この分野の学習を志す学徒は等しくこの選文集から出発するであろうから、収録されている物語の出所を確認しておくことはいまなお意義なしとはしない。以下の情報には何らの新味もないが、筆者個人の備忘並びに大方の便宜のために呈示する次第である。

なお物語が引かれる箇所、すなわち註釈が施される本文の詩節の章と番号を記しておくことは重要である。多くの場合諸註釈の同じ箇所に同一もしくは類似の物語が引かれることが観察されるからである。同じ詩節に同じ物語を引く習慣は恐らくはチュールニの段階には固定化していたのではなかろうか。ニルユクティは簡単過ぎて明確ではない。なお『ウッタラジャーヤー』の諸註釈に引かれる物語の包括的なリストについては別稿を用意している。

[略号]

Nc = *śrīman-Nemicandrācāryaviracitasukhabodhānāmnyā vṛttyā samalaṅkṛtāni ... śrī-Uttarādhyayāni.* (= śrīĀtmavallabha-granthāṅka 12). Valad: Sheth Pushpachandra Khemchandra, 1937.

これには再刊本も出ている。Muṃbaī: Divyadarśan Ṭrasṭ, s.d. 原本はポーティー形であるが、こちらは元の三頁分を一頁に配した大判の洋装本である。原本の葉数部分と表紙は削除され、通し頁が新たに付せられている。なお原本の数字は葉数であって頁数ではない。この点で、Mohanlal Mehta & K. Rishabh Chandra, *Prakrit Proper Names*, 2 pts (= L.D. Series 28, 37) (Ahmedabad, 1970, 72) は頁数として引いているので誤解を与える。下のリストでは葉数の次に括弧内に頁数をも記す。

Śs = *śrī-Śāntyācāryavihitaśiṣyahitākhyavṛttiyuktāni śrī-Uttarādhyayanāni* (= śreṣṭhi-Devacandra Lālbhāī-Jainapustakoddhāre-Granthāṅkaḥ 33, 36). Bombay: Shah Naginbhai Ghelabhai Javeri, 1916.

Jd = *śrīmanti Uttarādhyayanāni ... (Jinadāsagaṇimahattara)kṛtayā cūrṇyā sametāni.* Ratnapura: śrīṚṣabhadevajī keśarīmalajītyamidhā śrīśvetāmbarasaṃsthā, 1933.

Lv = *śrī Lakṣmīvallabhagaṇi-viracita-ṭīkā-sametam śrī Uttarādhyayanasūtram*, 2 vols. Amadāvād: Bhadraṃkar Prakāśan, 2001.

Bhv = *Uttarādhyayanasūtraṃ mahopādhyāya-śrīmadBhāvavijayagaṇiviracitayā vivṛttyā samalaṅkṛtam* (= ŚrīĀtmānanda-grantharatnamālā 32). Bhavanagar: Jina Atmananda Sabha, 1918.

その他にプラークリットの教本の選文部分に（部分的に）引かれることがあるが、語釈・注・訳が付いていることもあり読解の参考にもなるので、これらも挙げておく。本文はいずれもヤコービからの借用である。

Woolner = Alfred C. Woolner, *Introduction to Prakrit*. 1917; 2nd ed. 1928, rpt. Delhi: Motilal Banarsidass, 1975.

Shastri = N.C. Shastri, *Prākṛta-prabodha* (= The Vidyabhawan Sanskrit Granthamala 130). Varanasi: The Chowkhamba Vidyabhawan, 1965.

I. Bambhadatta

Nc 185r(124a).6-197r(132a). ad XIII.

Cf. Lv I.201.3-217.16. P.L. Vaidya, *The Story of Bambhadatta (The Twelfth Sovereign of the Jain Mythology)* (Poona, 1937) は編者の見識に基づいて本文を訂正して注を付したものであるが、先行する印刷本（すなわち Jacobi）に基づいている様である。

II. Saṇaṃkumāra

Nc 237r(158b).5- 242r(161c).9. ad XVIII.34-51.

Cf. Lv I.284.10-291.16 [ad XVIII.37].

III. Udāyaṇa

Nc 252r(168b).3-255r(170c).10. ad XVIII.34-51.

Cf. Lv I.306.16-312.28 [ad XVIII.16]. Woolner 156-161. 和訳は AnalInd XVII.

IV.-VII. Die vier Pratyekabudda

Nc 133r(89a).6-8. ad IX

= Śs 299r12-13 (Niry. 264-265). Jd 178.2-3 (Niry. 264-306). Lv I.127.8-9 (Niry. 264).

IV. Karakaṇḍu

Nc 133r(89a).9-135v(90c).7. ad IX

Cf. Śs 300r8-303r5. Jd 178.3-4. Lv I.127.10-30. Bhv 203r7-208a7. Shastri 295-299.

V. Domuha

Nc 135v(90c).7-136v(91b).12. ad IX

Cf. Śs 303r5-7. Jd 178.4. Lv I.131.1-132.17. Bhv 208r8-211r3. Woolner 139-145. 和訳は田中於菟弥『インド説話集』(東京：ピタカ, 1978).

VI. Nami

Nc 136v(91b).12-141v(94c).5. ad IX

Cf. Śs 303v1-304r1. Jd 178.5. Lv I.132.20-151.30. Bhv 211r4-219r12.

VII. Naggai

Nc 141v(94c).5-145v(97b).6. ad IX.

Cf. Śs 304r1-304v5. Jd 178.5. Lv I.152.1-158.28.

VIII. Mūladeva

Nc 59v(40a).14-65v(44a).8. ad III.1

Cf. Lv I.64.9-65.15. Shastri 285-294. 和訳は本庄良文『ジャイナ教研究』1 (1995), 45-63.

X. Agaḍadatta

Nc 84r(56b).5-94r(63a).6. ad IV.6

Cf. Jd 116.5-9. Bhv 146v2-158r1.

IX. Maṇḍiya

Śs 218r8-222r8. ad IV.7

Cf. Lv I.91.9-94.19. Bhv 159r1-160v3. Woolner 134-139.

X.a. Agaladatta

Śs 213v11-216v5. ad IV.6

XLIV. ジャイナ教聖典の本文批判に寄せて
==ウッタラジャーヤー第8章校訂案の再検討==

*）本節の成り立ちについてお断りしておかなければならないことがある。ウッタラジャーヤーのアールヤー詩節については先ずアルスドルフが先鞭を付け、パーリやその他の文献に現れるアールヤー詩節を分析して、独自の韻律論を打ち立てた。ノーマンはそれをウッタラジャーヤー第8章に適用し、更に徹底した形で聖典本文の校訂ないし読み替えを提案した。このヨーロッパ的学風に学習途上にあった筆者は目を奪われる思いをしたが、その後パーリ・ジャータカ、マハーヴァストゥ、サマラーイッチャカハー等のアールヤー詩節を自らscanするに及んで、アルスドルフ流の行き方に疑問を抱く様になった。その素朴な疑問は『ジャータカ全集』4（東京：春秋社, 1988), 365-367 以来折りに触れて述べてきた。冒頭に述べた様に平成17年の秋からアフメーダバードに滞在することができ、ウッタラジャーヤー第8章に関わる古註釈を参照する機会に恵まれた。それによりノーマンの校訂案に対して抱いていた疑問をもう少し明確な形にすることができた。滞在中研究その他について話をすることを求められたが、そのためにこのテーマについての所感を英語日本語でメモ的にまとめておいた。ノーマンの業績は発刊当時は画期的なものであったが、その直後に日本で紹介的論文が現れている。すなわち

山崎守一「Uttarādhyayana-sūtra 第八章 Kāvilīyaṃ の研究」『中央学術研究所紀要』9（1980), 1-23 である。(3) この日本語論文は彼の地では参照することができず、山崎博士にも日本語で業績があるということのみを現地の学者に伝えるだけに留まった。今回の日本語ヴァージョンの再呈示にあたり、山崎論文を再読し必要に応じて以下の本文に組み入れる作業をした。基本的にはノーマン説を継承する立場を採っておられるので、当初のメモを大幅に変更することはなかったが、資料を調えてから書き出す順序ではなかったため、不体裁を残すことになった。この点については山崎博士にお詫びしたいと思う。

また近年ヨーロッパからもアルスドルフ流に全面的には賛成しない気運が起こりつつある。ヘルマン・ティーケンがその動きの中にある人物であるが、インドではヨーロッパの文献を組織的に閲

覧することができなかったことと、ティーケン自身が各所に断片的に述べている様で、筆者がティーケン説の全貌を把握していないこともあり、これは今後の課題として残しておくことにした。こうして研究にはいつも不備を残したままで恥じ入ると共に、暫定的ではあるが、古註釈参照の結果を以下に記しておきたい。

折しもインド滞在中であったバンシダール・バット教授（一年の半分ずつをドイツとインドに住み分けている）に個々の点で賛意やコメントを頂いた。厚く感謝の意を表する。

== * * == * * == * * ==

本節は狭い意味ではウッタラジャーヤー第8章の本文についての再考であるが、これには本文批判と韻律の問題が不即不離の関係で関わっている。したがって広い意味では本文校訂一般の方法論をも見据えている。

西欧におけるジャイナ教研究の勃興期にはまだ刊本の出版が充分ではなく、初期の学者達はいずれも写本に基づいて研究を進めていた。したがって本文問題は研究史の最初期から意識されていた。草創期の段階より次の世代に属するアルスドルフになると、韻律の問題に注意が及び、それによるテクストの新古層の判別の基準が設定されるなど、研究は精密の度を増していった。特にアールヤーに関する研究、(4) なかんずく古アールヤーの発見は画期的なもので、聖典本文の原型を再構築するための大きな手掛かりを得る事となった。こうして新しい道具立てを具えた学者は次の様に述べて、従来の立場から面目を一新する。

> 先ず第一に、最古のそして最良の伝統的註釈者達といえども全く信用できないということである (5) ····第二に真に本文の読みが崩れてきたことの殆どではないにしても、その多くは非常に古く起こったことであり、現存のどの註釈書よりもはるかに古いというのが事実である。最古の写本とて例外ではない····現代の研究者は必要があればまたそうした方がよければ古註釈は顧慮しなくてよいばかりでなく、註釈書もしくはすべての写本の読みに反しても聖典本文を訂正することも差し支えないのである。(6)

多少誇張もあるかもしれないが、現代西欧の学者の自信の現れであり、またこうした立場が更に次の世代の学者に刺激を与えて研究を促進させたことも事実である。さてアルスドルフの意図を受け継いで、ウッタラジャーヤー第8章の本文校訂を試みたのが次の論文である。

K.R. Norman, "Kāvilīyaṃ: A Metrical Analysis of the Eighth Chapter of the Uttarādhyayana-sūtra," in A.N. Upadhye *et al.* (eds.), *Mahāvīra and his Teachings* (Bombay: Bhagavān Mahāvīra 2500th Nirvāṇa Mahotsava Samiti, 1977), 9-19.

この論文は出た当時に読みその時点から疑問を持っていたが、見るべき資料を閲覧できず、そのままになっていた。このたび多少資料にあたることができたので、そうした知見に基づいて、この校訂案に再検討を加えてみたい。

以下順に検討を施してゆくが、ノーマンの改訂案の意図が分かり易いように、先ずはŚsの注釈書中に伝えられる聖典本文をそのまま転写し、どうしてノーマンが読みを変更したのかを見てゆく手順をとる。多少回りくどいが、この方が分かり易いし、また一番古い注釈書であるŚsの本文は研究の出発点ともなるべきものである。ノーマンは実際にはこれを見ておらず、(7) 古いシャルパンティエのエディションに引かれている部分から間接的部分的にしか知らなかった。またそれ程迄にヨーロッパでは入手が容易ではなかったものであるから、ここに忠実に転写（diplomatic transliteration）しておくことはそれなりに意義のあることである。なおŚsの本文の直後に括弧付きで記した訳文はŚsを機械的に日本語に移し換えた仮のものに過ぎず、批判的翻訳ではない。(8)

adhuve asāsayaṃmi saṃsāraṃmi dukkhapaurāe |

kiṃ nāma hojja taṃ kammayaṃ? jeṇāhaṃ duggaiṃ na gacchejjā || 1 ||

（不安定でうつろいやすく苦しみに満ちた輪廻世界に於いて、私を悪趣へと到らせない行為の効力は如何なるものであろうか。）

先ずはこれを機械的にscan してみると

∪∪– | ∪–∪ | –∪ | ,– | –– | ∪–∪ | ∪∪– | –

–– | ∪–∪ | –– | ∪–,–– | –– | ∪–∪ | –– | –

第8章はひとつの詩節を除いて古アールヤーの韻律で詩作されている。最終の第8の枠組み（ガナ）を別として、すべて4モーラからなるガナの集積である。上の結果を見ると1行目の第3第4ガナと、2行目の第4ガナに問題があることがわかる。Ncの伝える本文を見ても *asāsayaṃmī* for *°yaṃmi, saṃsāraṃmī* for *°raṃmi, doggaiṃ* for *duggaiṃ* とあるので韻律の上で抱えている問題は同じである。これらの問題をノーマンは如何に解決したかを見てみよう。

adhuvaṃmi moha-gahaṇāe / saṃsāraṃmi dukkha-paurāe

kiṃ nāma hojja taṃ kammaṃ / jeṇam doggaiṃ na gacchejjā

jeṇam は jeṇaṃ の誤植。山崎論文では正されている。

韻律の上では下の通り完全な古アールヤーとなっている。

∪∪– | ∪–∪ | ∪∪– | –,– | –– | ∪–∪ | ∪∪– | ∪

–– | ∪–∪ | –– | –,– | –– | ∪–∪ | –– | –

確かに韻律の上での修復は手品の様によくできているが、新たに呈示された本文はまた別の問題を生みだしている。どうして韻律が“正常化”されたのかそのからくりを見てみよう。1行目は処格単数の語が4つ並んでいる。従ってノーマンがひねり出したadhuvaṃmiは意味的にはadhuveと同一である。しかしいずれかにアテストされている訳ではなく、モーラ数を調節するために3番目の語（及び置き換えられて消えてしまった2番目の語）の語尾-aṃmiをここにも転用したのである。何にもまして問題なのは2番目の語としてmoha-

gahaṇāeを本文に持ち込んだことである。これはŚsが挙げている異読に基づいており、ノーマンはシャルパンティエの注記から間接的に次の様に不正確に引用している："*Nāgārjunīyās tu padam evam paṭhanti: adhuvaṃmi moha-ggahaṇāe.*" Śsが挙げているところを正確に引用すると"nāgārjunīyās tu prathamapadam evaṃ paṭhanti -- 'adhuvaṃmi mohagahaṇae'"となるのであって、この異読は古アールヤーに合致しているというノーマンの言は成り立たない。また-gg-を-g-に変更することも述べているが、そもそも-gg-自体が存在していない読みであるから全く無意味である。ナーガールジュナの徒というのは註釈中にしばしば言及される別の流れに属する存在であるが、それの読みをファーストハンドではない材料から聖典本文に持ち込む感覚には驚かされる。本文批判の常識からいってもかなりピントがずれているし、アルスドルフの言う「注釈書もしくはすべての写本の読みに反しても聖典本文を訂正することも差し支えない」というのはこういうことを意味しているのではあるまい。古い注釈者達にもわからないオリジナルの読みの崩壊というのであれば、どうして注釈自体にその異読が記されているのであろうか。これはマージナルな伝承として一応書き留めておいたということであろう。確かにŚsのままでは韻律規則に反している。最小限度の操作で考えるならば、第2語の処格語尾末尾を長母音で読み、その次に vā などの小辞を想定すれば、韻律は正常化できよう。しかしこのふたつの操作のうち採用されるのは最初のものだけで、後者は注記にとどめる程度で聖典本文にまで持ち込むべきものではない。

第2行目の正常化のためにノーマンはkammayaṃをkammaṃに、jeṇāhaṃをjeṇaṃに読み替えている。いずれの場合にもすべての証拠に反して、と自ら断り書きを付けている。ところでkammayaṃとkammaṃは置き換え可能な等値関係にあるのだろうか。ノーマンは何の議論もなしに置き換えているが、kammaが単に行為そのものであるのに対してkammaya (kammaga, karmaka)は行為がもたらすある作用・力、残存効力といったものが意味される。もし教学的に意味のあるものであれば、聖典本文の語を変更するには相当の手続きが必要に思われるが、その点は一切沈黙されている。次の語については、1人称単数を示すための語釈のahaṃが混入したことに疑いがないとしている。しかし聖典本文のgacchejjāが1人称単数であることはもし代名詞主語がなければわからない。またどこの語釈にそれがあったのかも述べられてはいない。Śs Nc 共に ahaṃをアートマンを示すものであると註釈し、それが註釈レベルでの伝統的解釈であったようだ。ということは元々ahaṃが本文には無くてどの時点で混入したかを決定することはできず、そもそもそうした事実があったかどうかも証拠立てることはできない。確かにこのままでは2行目の第4ガナは問題を残したままであるが、ノーマン自身もモーラ過剰の第4ガナをいくつも認めているほどであるから、このまま伝承されている本文を留めておく方が穏当であろう。

なおノーマンは "Śāntisūri's v.l. is metrical if we read *jeṇaṃ doggaīŏ muccejjā*" と注記するが、これもŚsを正しく読んだ上でのことではない。Śsの挙げる異読は正確に引くと、"paṭhanti ca -- 'jeṇādhaṃ duggaīto muccejja' tti" である。

第1偈だけを見ても、韻律正常化のために過度のスペキュレーションが作動していることが見てとれた。以下の偈についても同様の手続きで進められているとしたら、ノーマンの呈示するテクストは通常の本文批判の方法に基づいた批判的校訂本文ではなく、韻律正常化ための過激な試みともなる恐れがある。以下繁を厭わず順に観察してゆこう。

vijahittu puvvasaṃjogaṃ na siṇehaṃ kahiṃci kuvvijjā |

asiṇeha siṇehakarehiṃ dosapausehi mucchaī bhikkhū || 2 ||

(前世の繋がりを放棄して、何ものにも愛着をなすべきではない。愛着なき修行者は愛着を起こさせるもととなる過失・小過失から解放されている。)

∪∪– | ∪–∪ | –– | –,∪∪ | –– | ∪–∪ | –– | –

∪∪– | ∪∪– | ∪∪– | –,–∪ | ∪∪– | ∪–∪ | –– | –

第1詩節に比べて問題は極めて少ない。2行目の第4ガナが5モーラになっていることが気になるくらいである。ノーマンのテクストと比較してみよう。

vijahittu puvva-saṃyogaṃ / na siṇehaṃ kahiṃci kuvvejjā

asiṇeha siṇeha-karehiṃ / dosa-paŏsehi mucchae bhikkhū

scan の結果は上と全く同一であるから、再掲は控える。注目すべきは問題となっている2行目の第4ガナの5モーラを認めていることである。前述した様にノーマンはこの他にも過剰モーラを第4ガナにのみ認めているが、このことに関する説明は一切与えられてはいない。ただし第4ガナを正常化するために必要以上に読みに変更を加えずに、あるがままを認めようとする方向は正しい措置である。刊本によっては2行目の初めをasiṇeha-siṇeha-karehiṃと合成語にしているものもある。そうなると「不愛着・愛着を起こさせる」となるが、これは過失に掛かる形容句なので、不愛着は切り離して、Śs Ncの言うが如くゼロ語尾の主格形と見なし、末尾のbhikkhūに掛けて読むのが適当である。ノーマンのpaŏsehiは妥当であり、Śsの伝えるpausehiと同じものである。長母音oを韻律の要求で短く読むことを示すためにuで表記することがあるからである。ただしŚsは聖典本文を正しく転記しながらもこの意味がわからなかったらしく、"'doṣapadaiḥ' aparādhasthānaiḥ" と註釈しているが、誤解である。従ってノーマンの "Śāntiśūri explains *dośa-padaiḥ*, i.e. reading *dosa-paehiṃ*" "is not metrical" といったコメントは不要である。-ehiṃについては、Śs Nc ノーマンいずれも処格複数に解している。

to nāṇadaṃsaṇasamaggo hiyanissesāĕ ya savvajīvāṇaṃ |

tesiṃ vimokkhaṇaṭṭhāe bhāsai muṇivaro vigayamoho || 3 ||

(かくして知・見と完全合一し、愚かさを克服したる聖者の最上者は、すべての生きものの利益と救いのために、それらの解脱のために、語る。)

–– | ∪–∪ | ∪∪– | –,∪∪– | ––∪ | ∪–∪ | –– | –

−− | ∪−∪ | −− | −,− | ∪∪∪∪ | ∪−∪ | ∪∪− | −

1行目の第4第5ガナに過剰モーラが見られる。

to nāṇa-daṃsaṇa-samaggo / nissesāya savva-jīvāṇaṃ

tesiṃ vimokkhaṇ'aṭṭhāe / bhāsaī muṇi-varo vigaya-moho

−− | ∪−∪ | ∪∪− | −,− | −− | ∪−∪ | −− | −

−− | ∪−∪ | −− | −,−∪ | −∪∪ | ∪−∪ | ∪∪− | −

ノーマンはすべての証拠に反して hiya を削除することにより過剰モーラを解消しようとした。これは第5詩節からの影響で入り込んで本来なかったものと考えた様である。しかし第5詩節でも休止（caesura）の直後にこの語は置かれており、口誦定型理論からすれば、同じ韻律環境に同じ語が出現する可能性は大であるから、ノーマンの様にそれに対して何のコメントもなく一方的に決めつけるのは不適切である。それよりも注目さるべきはŚsのnissesāĕという語形である。実はノーマンの印刷本はnissesāyaかnissesā yaかわかりにくい印刷であるが（これはノーマンの責任ではない）、恐らくは前者を意図しているものと思われる（山崎論文も前者に印刷し目的を表す与格であると明記してある）。Ncもhiyanissesāyaという読みだからである。hiyanissesāĕ yaとhiyanissesāyaの読みの対立があるが、これは前者が後者から派生したのであろう。元来hiyanissesāyaという与格であったが、2行目のaṭṭhāeという与格形に引かれてここも-āe与格にしてしまった。そうすると元来の与格語尾の一部のyaを独立の一語ya (Skt ca)と解するより仕方なくなった。そうすると一音節増加するので、せめて半モーラでも減らそうと、ĕの表記をしたのであろう。Śsは註釈文中に "caśabdo bhinnakramaḥ" と書いているのでya (= ca)の存在は明確に意識している。従って元来の与格語尾であると思われるものを残してĕを除去すると第5ガナは4モーラにできる。結果的に見かけはノーマンと同じになるが、背後に流れる考え方が違う。それよりも興味深いのはhiyanissesaに対するŚsの説明である。先ずは "niḥśreyaso -- mokṣaḥ" という語釈を挙げ、別解としてプラークリット形によく対応するものとして "niśśeṣaṃ -- samastaṃ" というのも挙げている。Ncは第一の語釈のみを挙げているし、Lvも同様のパラフレーズをしているので、こちらが伝統的な理解であったと思われる。ただしNcもそうであるがmokṣaと置き換えるのは、2行目のvimokkhaṇ'と重複するのであまり上手な言い換えではない。第4ガナは依然過剰モーラのままになるが、モーラ数調節だけのためにhiyaを削除するのは躊躇されるので、保留のままとどめておきたい。

2行目の休止の次の語をNcはbhāsatīと語尾を長母音に読み、ノーマンはそれに基づいて長母音をとどめ、その結果第4ガナを過剰モーラにしている。語尾を長母音にしていない読みはŚsだけでなく、ノーマンも参照しているSuttāgameもそうであるのに、あれほどモーラ数のために自在に読みを変更する手法を採りながら、どうしてモーラ数に問題のない現存する読みが採られなかったのか理解に苦しむ。Ncの長母音表記は勿論ノーマンと同じくscanを誤った結果である。

savvaṃ gaṃthaṃ kalahaṃ ca vippajahe tahāvihaṃ bhikkhū |

savvesu kāmajāesu pāsamāṇo na lippaī tāī || 4 ||

(修行者はそうした類のすべての枷や口論を捨て去るべきである。その様に［正しく］見る人はすべての種類の欲望に執着しない。)

−− | −− | ∪∪− | ∪,− | ∪∪− | ∪−∪ | −− | −

−− | ∪−∪ | −− | ∪,−∪ | −− | ∪−∪ | −− | −

この詩節は諸本の伝承に問題もなく、ノーマンの与える本文も正書法の点を除けばこれと全く同一である。第4ガナにモーラ不足が見られるが、ガナの途中に休止が見られる場合、そこで半拍くらいは時間の経過が見られるから、第4ガナのモーラ不足を一音節語を無理に押し込んで解消するより、そのままにとどめておく方が妥当である。ノーマンは本文は変更しなかったが、注記の中で1行目の第2ガナがspondee(−−)になることに疑問を持ち、kalahaṃ gaṃthaṃと二語の順序を逆転することでそれが解消できると提案している。第2ガナに関する問題提起として受け止めて、更に観察データを増やしてゆく必要があろう。尚ノーマンは "Śāntisūri's v.l. *tahāvihe* is equally metrical" と述べるが、正確ではない。Śsを引くと "pāṭhāntarataś ca -- tathāvidho" とあり、異読を挙げているのでなく、それがbhikkhūにかかるという別解を挙げているのである。

bhogāmisadosavisanne hiyanisseyasabuddhivoccatthe |

bāle ya maṃdie mūḍhe bajjhai macchiyā va khelaṃmi || 5 ||

(快楽の溺れる過失に陥り、利益・繁栄・知性に反し、未熟で愚鈍な馬鹿者は、蠅が蠅取り紙に捕らえられる様に束縛される。)

−− | ∪∪− | ∪∪− | −,∪∪ | −−∪ | ∪−∪ | −− | −

−− | ∪−∪ | −− | −,− | ∪∪− | ∪−∪ | −− | ∪

1行目第5ガナに問題がある。

bhogâmisa-dosa-visanne / hiya-nissesa-buddhi-voccatthe

bāle ya maṃdie mūḍhe / bajjhaī macchiyā va khelaṃmi

−− | ∪∪− | ∪∪− | −,∪∪ | −− | ∪−∪ | −− | −

−− | ∪−∪ | −− | −,−∪ | −− | ∪−∪ | −− | ∪

ノーマンはすべての証拠がnisseyasaとあるのに対してnissesaと書き替えている。第3詩節の注記では第5詩節からの読みが混入したと言っているが、それはすなわち元来違う読みであったことを前提とした発言であるが、ここでは第3詩節に合わせて書き替える、即ち同じ読みであることを前提とした操作をしている。ただしŚsもふたつの詩節のこの語を同じものと考えていた様で、類似の説明が見られるばかりか、別解にも同じものが挙がっている。Ncも第3詩節と同様の説明をしている。更にŚsの註釈文中に引かれる聖典の文は "hiyaṇissesabuddhivoccatthe" とyaのないノーマンの言う短い語形で引かれているので、ノーマンの改訂案と同じくこれを採用すべきである。

ノーマンの2行目の第4ガナは過剰モーラになっているが、第4ガナの変則は割と寛容に認めている。しかし注記に "*bhajjhai* is also possible metrically, giving a 4th *gaṇa* –,– and a 5th ∪∪–" と述べているが、こちらも可能というのではなく、こちらが採用されるべきである。またノーマンは随時短いĕを認めているが、mūḍheにもそれを適用すれば第4ガナは∪,–∪と正常化できるのにそれをここでしなかったのも不思議な感じがする。

duppariccayā ime kāmā no sujahā adhīrapurisehiṃ |

aha saṃti suvvayā sāhū je taraṃti ataraṃ vaṇiyā va || 6 ||

(これらの欲望は放棄し難い。堅固ならざる人には容易には棄て難い。だから善き誓いを持つ善人達がいる。その人達は商人の様に渡りがたい所を渡る。)

–∪– | ∪–∪ | –– | –,– | ∪∪– | ∪–∪ | ∪∪– | –

∪∪– | ∪–∪ | –– | –,–∪ | –∪∪ | ∪–∪ | ∪– | ∪

1行目の第1ガナと2行目の第4第7ガナに問題がある。実はガナの区分けは読者が恣意的に決定する度合いが大きい。2行目は例えば

∪∪– | ∪–∪ | –– | –,– | ∪–∪ | ∪∪– | ∪∪– | ∪

の様に区分けをすると、4モーラごとのガナが並ぶ。ただしこの場合第6ガナにamphibrachusがくるというアールヤーの根本原則が崩れること、またそれが奇数ガナである第5ガナに出現するという細則を破ることになり、アルスドルフ流に研究者によって拒否されるであろう。それを回避するためのノーマンの手法を伺おう。

dupariccayā ime kāmā / no sujahā adhīra-purisehiṃ

aha santi suvvayā sāhū / je taranti ataraṃ vaṇīyā vā

∪∪– | ∪–∪ | –– | –,– | ∪∪– | ∪–∪ | ∪∪– | –

∪∪– | ∪–∪ | –– | –,–∪ | –∪∪ | ∪–∪ | –– | –

最初の語の-pp-を-p-とするのはNcにより支持されるし、これを採用するのは妥当である。2行目の第4ガナには過剰モーラを認めているが、je にĕを適用すれば正常化できる。第7ガナの正常化のためにノーマンはすべての証拠に反してvaṇīyāと長母音を導入する。しかしこうした自在の長短の変更は上で試みに挙げたガナの区分けと同じくらい認めがたいことではなかろうか。metri causaによるヴァリエイションと明確に認定できるこうした例はこれまでにきちんと蒐集確認されてはいないのではないか。Śsは "paṭhanti ca -- 'je taraṃti vaṇiyā va samudda'm iti" と異読を引いているが、ノーマンはこれに対してもsāmuddaṃと読めば正常化できると述べているので、これは彼の常套手段のようだ。なお最後の語は Skt iva 相当の語であるが、ノーマンはvāを採っている。Ss Nc共に聖典本文はvaであるが、註釈文中にはいずれも "vāśabdasyevārthatvāt" という挙げ方をしているが、このva/vāの揺れについては筆者にはつまびらかにし得ない。

samaṇā mu ege vadamāṇā pāṇavahaṃ miyā ajāṇaṃtā |

maṃdā nirayaṃ gacchaṃti bālā pāviyāhiṃ diṭṭhīhiṃ || 7 ||

（或る愚かな未熟者達は「我等は沙門である」と言いながらも、獣と同じで生き物の殺害を理解しないで、こうした悪い見解のために地獄へと赴く。）

∪∪– | ∪–– | ∪∪– | –,– | ∪∪– | ∪–∪ | –– | –

–– | ∪∪– | –– | ∪,– | –– | ∪–– | –– | –

1行目の第2ガナと2行目の第4第6ガナに問題がある。

"samaṇā mu" egĕ vadamāṇā / pāṇa-vahaṃ miyā ajāṇantā

mandā nirayaṃ gacchanti / bālā pāviyāhi diṭṭhīhiṃ

∪∪– | ∪–∪ | ∪∪– | –,– | ∪∪– | ∪–∪ | –– | –

–– | ∪∪– | –– | ∪,– | –– | ∪–∪ | –– | –

1行目第2ガナの問題は egĕ と語末を短母音で読むことにより解決する（ĕの存在についての論争は Pischel § 45 Anm.1）。amphibrachusは偶数ガナにしかこないというのが古典韻律論書の細則であり、またアルスドルフ等の近代研究者は古アールヤーにもこれを適用するほどである。また逆に第6では必ず、第2でもこれは非常に好まれる傾向にあるから、この措置は極めて妥当に思われる。ノーマンは "Charpentier quotes the commentaries to show that *mu = vayaṃ*" と述べ、このピシェルにもなく他のジャイナ学者にも採られていない事象を、マハーヴァストゥとヘーマチャンドラに平行事例を見つけだしている。しかし結局はこの箇所をノーマンは如何に理解したのかは明言されてはいないが、注記の長さからして、1人称複数代名詞の珍しい用例であると認めている様である。ところでŚsの該当箇所を見ると "'mu' ity ātmanirdeśārthatvād vayam iti" とあり、1人称複数が意味されていることは述べられているが、muという語形が1人称複数代名詞であることが言明されているかどうかは疑問である。というのはNcは "'smaḥ' ity ātmanirdeśārthatvād vayam iti" と語形自体はコピュラの1人称複数としているからである。一体1人称複数代名詞であると言明している伝統的註釈があるかどうかは明かではない。それよりも重要なのはsmaḥに対するプラークリットの対応形はmoであるが、ここでmuという短母音形が現れているのは明らかに韻律的要求からだということである。Pischel § 85には『アーヤーランガ』から同様の例が引かれている。伝承者たちが聖典本文にそれを伝えていたことは第2詩節の pausehi（Skt pradośaiḥ）と共に注目すべきである。

2行目第4ガナに関しては、gacchantī と動詞語尾を長母音で読むことにより（cf. vss. 4, 18）正常化できるが、休止を含む第4ガナのモーラ不足は問題ないし、ノーマンもそのままにとどめている。第6ガナに関してはすべての証拠pāviyāhiṃに対してノーマンが語末のアヌスヴァーラを削除して短音節に改変している。この手法は第10詩節にもみられるが、いずれの場合もアヌスヴァーラの保持・省略・mへの読み替えのどれを採用するかの基準は明確ではない。

na hu pāṇavahaṃ aṇujāṇe muccejja kayāi savvadukkhāṇaṃ |

evam āriehim akkhāyaṃ jehiṃ imo sāhudhammo pannatto || 8 ||

(生類の殺害は認められない。いつか一切の苦しみから解放されよう。このように尊者により述べられている。その人によってこのよき教えが明らかにされた。)

∪∪– | ∪∪– | ∪∪– | –,–– | ∪∪– | ∪–∪ | –– | –

–∪– | ∪–∪ | –– | –,–– | ∪–– | ∪–– | –– | –

1行目は第4ガナに、2行目は多数のガナに問題がある。

na hu pāṇa-vahaṃ anujāṇe / muccĕ kayāi savva-dukkhāṇaṃ

ev' āriehim akkhāyaṃ / jehim imŏ sāhu-dhammŏ pannatto

∪∪– | ∪∪– | ∪∪– | –,– | ∪∪– | ∪–∪ | –– | –

–– | ∪–∪ | –– | –,–∪ | ∪∪– | ∪–∪ | –– | –

1行目のモーラ数を減らすために願望法語尾 -jja を削除して願望法の別形にしている。それでも減少に不十分なのでĕを短く読むことをノーマンは提案する。こうした操作を繰り返していけば、確かにモーラ数の調節はいくらでも可能であろう。

2行目は問題が多いのでノーマンの操作の数もそれに比例して増えている。ノーマンの ev' āriehim は若干の証拠支持がある。Śsは註釈文中に "'evāriehiṃ' ti 'evam' uktaprakāreṇā"ryaiḥ" と引いて混乱を示している様であるが、案外Śsの見ていた聖典本文は ev で理解が evam だったのかもしれない。Nc も聖典本文は "evam āriehiṃ" だが註釈文は Śs と酷似している：" 'evam' uktaprakāreṇa 'āryaiḥ' tīrthakarādibhiḥ". これが註釈者達の間の伝統であったのだろう。evamは1行目の内容を受けているので読みとしてはevaよりよい。しかしモーラ過剰を引き起こしているので、変更の必要があるということである。だがよく観察するとモーラ過剰を引き起こしているのはevamではなく、次のāriehimである。-ry-という子音連続がスヴァラバクティにより分解される際には全体の音量は元のものと等しいのが通常である。すなわち今の場合で言えば、ārya > āriya > ariyaといったプロセスが予想される。āriehimは後のイノヴェイションであり、聖典段階ではariehimとあり、それであれば第1ガナは –∪∪ と正常化できる。第13詩節dに類似の句が出現するが、これについては当該箇所の註を参照。第4ガナのモーラ過剰については解消はできないにしても（すべての証拠に反して）母音の前のアヌスヴァーラを-mに変えることで1モーラ減らすことで、,––を回避できることを特に強調している。,––についてはアルスドルフが『スーヤガダンガ』I, 4で8例を指摘しているので、完全に認められないわけでもない。しかし母音の前の-mは同じ行でもアテストされる2例があるので、この変更はそれ程過激ではない。ただ第4ガナにはなお観察されるべき問題が残っているのでその性質を見落とさないためにも、そのままとどめておくことも必要かと思われる。残りのモーラ過剰の2件はいずれもŏと短母音に読むことで解決しているが、賛成される。ただĕŏが可能である条件は見定めなければならない。

pāṇe ya nāivāijjā se samiyatti vuccaī tāī |

tao se pāvayaṃ kammaṃ nijjāi udagaṃ va thalāo || 9 ||

(生類を害してはならない。かかる聖者は<規則遵守者>と呼ばれる。そこからその人は悪業を流しさる。[高] 地から水が [流れ去る] 様に。)

−− | ∪−∪ | −− | −,− | ∪∪− | ∪−∪ | −− | −

∪− | −−∪ | −− | −,− | −∪∪ | ∪−∪ | ∪− | −

2行目の第1第2第7ガナにモーラの過不足が生じている。

pāṇe ya nâivāejjā / se "samīi" tti vuccaī tāī

tāo sĕ pāvayaṃ kammaṃ / nijjāi udagaṃ va thālāo

−− | ∪−∪ | −− | −,−∪ | −− | ∪−∪ | −− | −

−− | ∪−∪ | −− | −,− | −∪∪ | ∪−∪ | −− | −

1行目の問題点は tti の直前の語であろう。Śsは "sa 'samitaḥ' samitimān iti" と語釈を与える。Ncは聖典本文はsamieとしながらも、語釈は全く同じであるから、語尾にマガディズムがあるだけで同じ語と理解される。驚くべきことにノーマンは第4ガナの韻律過剰をもたらしながらもsamīiと読んでいることである。注記では何も述べていないが彼の英訳では "circumspect" としているので、samitaが理解されていることになる。なおついでながらここの部分の英訳は "(being) such a one he is called ..." とあるのでtāīは "(being) such a one" とされていることになるが、ŚsもNcも"prāṇitrātā"と語釈を与えており、Skt trāyinが想定されることに問題はない。ここにtādṛśīを想定することは殆ど不可能である。またsamīiの直前の語を2行目でしたように sĕ とすれば∪,−∪という具合に正常化できるのにどうしてしなかったのであろうか。ĕ ŏと読む措置が一定の条件の許ではなく甚だ恣意的になされているのではないかと危惧を覚える。

2行目最初の語をすべての証拠に反してtāoと変更しているが、Skt tataḥの対応形（ŚsもNcもこの理解）ではなく、本行最終語のthalāoに合わせて格語尾形に変えたものである。この措置については注記にてアルスドルフのテーリーガーター420への註とPischel §425を援用している。次のsĕについては上に述べた通りであるが、ここのふたつの措置はその条件さえ明確化されれば認められ得るものである。最後のthalāoをhālāoに変更する過激さにはついてゆけない。対応Sktでいうとそれぞれsthala sthālaであるが、別の語であるからである。しかしノーマンの訳 "from high ground" からする限りあくまでsthalaが想定されているので、韻律の要求によりこの場限りの単語を造りだしたことになる。しかしこの場合は母音を長くすることにより別の語が想定されてしまうから、聖典の本来の読みであったとは考えられない。単にモーラを増やすだけであればvaをivaに変える方が意味の変更を伴わず、まだましであろう。しかしこうした場所はモーラ不足のまま読みをとどめてゆくのがより適当である。

山崎博士は第4詩節の注記でtāī = tādin = tādṛśを想定しておられるが、意味的には「修業

完成者、ジナ」とされているので、究極的には同じことになる。

jaganissiehiṃ bhūehiṃ tasanāmehiṃ thāvarehiṃ ca |

no tesim ārabhe daṃḍaṃ maṇasāvayasākāyasā ceva || 10 ||

(世界に依拠する生類、動的と名付けられる者、不動の者に、意・口・身による罰をその人達に［与え］始めてはならない。)

∪∪– | ∪–– | –– | –,∪∪ | –– | ––∪ | –– | ∪

–– | ∪–∪ | –– | –,∪∪ | –∪∪ | ––∪ | –– | ∪

過剰モーラが1行目第2, 6ガナ2行目第6ガナに見られる。

jaga-nissiehi bhūehiṃ / tasa-nāmehi thāvarehiṃ ca

no tesim ārabhe daṃḍaṃ / maṇasā vayasa kāyasā ceva

∪∪– | ∪–∪ | –– | –,∪∪ | –– | ∪–∪ | –– | ∪

–– | ∪–∪ | –– | –,∪∪ | –∪∪ | ∪–∪ | –– | ∪

ノーマンの解決法は1行目では-ehiṃのアヌスヴァーラを自由に残したり削除したりすることである。ノーマンはオリジナルでは与格複数であったが、ジャイナの伝統でも既にこの語尾の格認定が一定しなかったと推定している。与格・具格・処格・属格と様々な理解があったという。しかし聖典の作者は2行目のtesimと同じ機能を持たせているわけであるから、意味的には理解の変異は起こらなかった筈である。Śs Nc共に処格複数でパラフレーズしている上、tesimにも処格複数をあてている。山崎博士はこの詩節がPischel § 371に引かれていて処格の意味の具格であるとの説明があることを指摘している。そこでのピシェルの引き方はjaganissiehī bhūehiṃ tasanāmehī thāvarehiṃ ca | no tesim ārabhe daṃḍaṃとなっていて、鼻音を伴う同一の語尾が四つ並列されていることが強く意識されていることは注目すべきである。-a語幹名詞が-s語幹名詞の具格形と並列された場合類推から-asāという具格になることはしばしば見られる。特に身口意の場合は頻繁でmaṇasā vayasā kāyasāの出所はPischel § 364に列挙されている。ここでは韻律の要求からvayasaとなりそれはNc によって支持される。三語を分書しないŚs は不適である。

suddhesaṇā u ṇaccā ṇaṃ tattha ṭhavejja bhikkhū appāṇaṃ |

jātāe ghāsam esijjā rasagiddhe na siyā bhikkhāe || 11 ||

(清浄な行乞を知って修行者はそこに自己を確立すべきである。生きるため［だけ］に食物を求めるべきである。行乞をする者は味に貪欲であってはならない。)

–– | ∪–∪ | –– | –,– | ∪∪– | ∪–– | –– | –

–– | ––∪ | –– | –,∪∪ | –– | ∪∪– | –– | –

1行目第6ガナ2行目第2第6ガナに問題がある。

suddh'esaṇāŏ naccā ṇaṃ / tattha ṭhavejja bhikkhu appāṇaṃ

jāyāe ghāsam esejjā / rasa-giddhe na sīya bhikkhāe

−− | ∪−∪ | −− | −,− | ∪∪− | ∪−∪ | −− | −

−− | ∪−∪ | −− | −,∪∪ | −− | ∪−∪ | −− | −

最初の単語は対格でなくてはならないから、u (Skt tu)を一語と見なして分書してあるŚs Ncの印刷本では（写本はそもそも単語ごとに分書しない）意味がとれないので対格複数とするノーマンの読みは正しい。恐らくは韻律の要求によるoの短母音化によって生じたuが理解されなくなって分書したのであろう。すなわちesaṇāo > esaṇāu > esaṇā uといった過程を経たものと推定される。ただしノーマンはこの分書を "equally metrical" と容認している口振りである。韻律に合わなければ意味のよい読みをも変更する、韻律に合っていれば意味がとれなくとも受け入れるというのがノーマンの基本的立場である。なお分書は印刷本の段階で生じたもので、註釈者達の段階のものではない。Śs Nc共にuに対する語釈がなく、対格複数に理解しているからである。次の語も事情は同じである。ノーマンの本文は分書してあるが、Critical Apparatusに "N *ṇaccā ṇaṃ* as two words" とあるのでノーマンの意図はnaccāṇaṃという絶対分詞の形であったことは疑いない。この場合もŚs Nc共にṇaṃに対する語釈はないので、註釈者達は絶対分詞を正しく理解していた。印刷本の段階で分書されたわけだが、ノーマンの場合もそれと同じく印刷段階で分書されたのは偶然の一致にしては出来過ぎている。第6ガナの過剰モーラはすべての証拠に反して語尾を短母音にすることで解消しているが、男性u語幹の主格単数は通常は-ūである。これも条件を設定すれば認められるであろう。

2行目最初の語がjāyāĕと表記されなかったのは単なる印刷ミスであろう。第2ガナにamphibrachus (∪−∪)が好まれる傾向からも受け入れられる措置である。問題は第6ガナにてすべての証拠に反して siyā を sīya に置き換えたことである。この措置については流石に注記で述べられているが、どこにもアテストされている形ではなくあくまで推定形というかノーマンの発明である。それを聖典本文に持ち込むのであるから相当に過激である。更に注記の最後にアナロジーから推定される*sejja が挙げてあるが、当該箇所とどう関わりがあるのか不明である。

paṃtāṇi ceva sevijjā sīyapiṃḍaṃ purāṇakummāsaṃ |

adu bukkasaṃ pulāgaṃ vā javaṇaṭṭhā nisevae maṃthuṃ || 12 ||

（粗末な食べ物を用意すべきである。［すなわち］冷たい団子、古い酢粥、或いは又古い米、又は焚いた粟を生命［を維持する］ために用いるべきである。）

−− | ∪−∪ | −− | −,−∪ | −− | ∪−∪ | −− | −

∪∪− | ∪−∪ | −− | −,∪∪ | −− | ∪−∪ | −− | −

1行目第4ガナに過剰モーラが見られる。

paṃtāṇi ceva sevejjā / sīya-piṃḍaṃ purāṇa-kummāsaṃ

adu bukkasaṃ pulāgaṃ vā / javaṇ'aṭṭhaṃ nisevae manthuṃ

1行目第3語をsevejjāと読むのはNcに指示されるし、実質的な違いをもたらすものではない。ノーマンは第4ガナの過剰モーラを認めているので、scanの結果は全く同一である。vāをvaと読めばmetricalになるがと付け加えているが。ただしノーマンは "all *javaṇ'atthāe*, Śantisūri reads *javaṇ'aṭṭhaṃ vā sevae maṃghuṃ*" としているが正しくない。Śsは異読も引いているが "paṭhyate ca -- 'javaṇaṭṭhāe ṇisevae maṃthuṃ' ti" とありこれもノーマンの引く文とは異なっている。

paṃtāṇiをノーマンは「人里離れた所」と解し、山崎博士も同意する。Śs Nc共に「無味な食物」とする。AMDに「粗末な食物」の意味が与えられていることは山崎博士も記す通りであり、Candra, *Pkt-Hind K* s.v. paṃtaにも「無味の、貧しい、古い」等々の意味が記載されている。文脈からしても伝統的な解釈の方がよさそうである。ヤコービも "He should eat what tastes badly" として伝統に従っている。

je lakkhaṇaṃ ca suviṇaṃ ca aṃgavijjaṃ ca je pauṃjaṃti |

na hu te samaṇā vuccaṃti evaṃ āyariehiṃ akkhāyaṃ || 13 ||

(印、夢、体の特徴［による占い］を実践する者達、それは確かに沙門とは言われない。この様に先生方によって言われている。)

−− | ∪−∪ | ∪∪− | ∪,−∪ | −− | ∪−∪ | −− | ∪

∪∪− | ∪∪− | −− | ∪,−− | −∪ | ∪−− | −− | −

2行目の第4, 6ガナに問題がある。第5, 6ガナは | −∪∪ | −− | と理解すべきかもしれない。

je lakkhaṇaṃ ca suviṇaṃ ca / aṃgavijjaṃ ca je pauṃjanti

na hu te "samaṇā" vuccanti / evam āyāriehim akkhāyaṃ

−− | ∪−∪ | ∪∪− | ∪,−∪ | −− | ∪−∪ | −− | ∪

∪∪− | ∪∪− | −− | ∪,−∪ | −− | ∪−∪ | −− | −

ノーマンはアヌスヴァーラをmと読んで過剰モーラを解消している。いずれの場合も Nc により指示されているので正しいと思う。ただしアヌスヴァーラが音声的には単に直前の母音を鼻音化するだけの機能であれば、evã āyāriehî と理解されるものとなる。山崎博士の異読列挙のN āyariehiṃは誤植であろう。Nはāyariehim. āyari- / āyāri-の問題については第8詩節のāriehimについての議論をも参照。

iha jīviyaṃ aniyamittā pabbhaṭṭhā samāhijogehiṃ |

te kāmabhogarasagiddhā uvavajjaṃti āsure kāe || 14 ||

(ここ［＝現世］での生活を節制をせず、瞑想・精神集中から脱落し、欲望・楽しみ・味覚に貪欲なる者は、阿修羅の身体に再生する。)

∪∪− | ∪−∪ | ∪∪− | −,− | −− | ∪−∪ | −− | −

−− | ∪−∪ | ∪∪− | −,∪∪ | −− | ∪−∪ | −− | −

韻律の上でも意味の上でも問題のない詩節で、ノーマンの本文も正書法の点を除けば同一である。

iha-jīviyaṃ aniyamettā / pabbhaṭṭhā samāhi-joehiṃ

te kāma-bhoga-rasa-giddhā / uvavajjanti āsure kāe

ノーマンはiha-jīviyaṃと複合語に理解しているが、Śs Nc共に聖典本文も語釈でも二語として扱っている。もちろんいずれに解しても意味に違いをもたらさない。

tatto 'viya uvaṭṭittā saṃsāraṃ bahuṃ pariyaḍaṃti |

bahukammalevalittāṇaṃ bohī hoi sudullahā tesiṃ || 15 ||

（そしてそこから上昇するといえども、輪廻世界を多く彷徨う。多くの［悪い］行為の汚れで穢れた者にとって、悟りは誠に得難い。）

−− | ∪∪∪ | −− | −,− | −− | ∪−∪ | ∪∪− | ∪

∪∪− | ∪−∪ | −− | −,− | −−∪ | ∪−∪ | −− | −

1行目の第2ガナと2行目の第5ガナに問題がある。

tatto vi ya uvvaṭṭittā / saṃsāra bahu anupariyaḍanti

bahu-kamma-leva-littāṇaṃ / bohi hoī sudullahā tesiṃ

−− | ∪∪− | −− | −,− | −∪∪ | ∪∪∪∪ | ∪∪− | ∪

∪∪− | ∪−∪ | −− | −,−∪ | −− | ∪−∪ | −− | −

Śsは聖典本文の表記にもかかわらず "tato 'pi ca" というサンスクリット化を与えているのでノーマンの分書がよい。Ncも分書している。問題は次のuvaṭṭittāである。Śs Nc共に聖典本文は同じで、註釈には Śs は "'udvṛtya' tat parityāgenānyatra gatvā" と、Ncは " uddhṛtya' niḥsṛtya" とある。意味的にはどちらも近いが、音対応からするとŚsの方がよい。ただし接頭辞と語根の接続部の子音連続が聖典本文では単一子音になっているので、ノーマンのuvvaṭṭittāという重子音の読みは正しい。また韻律も正常化できる。1行目後半はŚsの与える本文で何らの問題もないが、ノーマンの使用した資料にはいずれも動詞は接頭辞anu-を伴っていたためにモーラ過剰となって、先行するふたつの単語のアヌスヴァーラを省略して解決を試みている。ただしその結果第6ガナは∪∪∪∪となり、本章での唯一の事例となってしまっている。ノーマンは "Śāntisūri quotes v.l. *aṇuparicaranti*" と記すが正しくない。Śsの引く異読は "paṭhanti ca -- 'aṇucaraṃti' tti spaśṭaṃ" である。接頭辞に関してはpari-とanu-のふたつの読みがあったがある時期にふたつが合体してanu-pari-という読みが派生したのであろう。従ってノーマンのアヌスヴァーラ省略の工夫は必要がない。ノーマンは注記で "the spelling *saṃsāra* is intended merely to show that the final syllable is to be scanned as short, and could equally well have been printed as *saṃsārā*. Neither transcription [sic] is intended to show how the syllable was actually pronounced." と述べるが、後半の文は理解不能である。*saṃsārā*という表記は実際の発音に近づけようという試みではないのか。またノーマンは

"N also includes a reading *aṇupariyatanti* in the commentary, but explains *sātatyatena paryaṭanti*" と記すが正しくない。Ncの註釈文は "'anupariyanti' sātatyena paryaṭanti" である。

2行目のbohī hoiは韻律上の不都合を引き起こしている。ノーマンの注記では "the reading *bohī* found in all the editions is possible, giving the opening –– after the caesura. The reading *bohi*, however, gives the preferable opening — .," とあるが理解不能である。しかも引用箇処の最後は–∪の誤植であろう。ふたつ目のopeningのscansionは–∪の印刷ミスかもしれないが、それでも前半の文では第4ガナの過剰モーラを認めることになる（もっともこのパターンは2cd, 12abにも認められるが）。

kasiṇaṃpi jo imaṃ loyaṃ paḍipunnaṃ dalejja egassa |

teṇāvi se ṇa saṃtusse ii duppūrae ime āyā ||16 ||

（この全世界を［金銀等で］一杯にして一人の人に与えたとしても、それでもその人は喜ばない。それ程迄にこの自己存在を満たすのは難しい。）

∪∪– | ∪–∪ | –– | –,∪∪ | –– | ∪–∪ | –– | ∪

–– | ∪–∪ | –– | –,∪∪ | –– | ∪–∪ | –– | –

韻律の上では何の問題もなく、ノーマンの与える本文も正書法的な異なりがあるだけである。

kasiṇaṃ pi jo imaṃ loyaṃ / paḍipuṇṇaṃ dalejja ekkassa

teṇâvi se na saṃtusse / ii duppūrae ime āyā

jahā lābho tahā lobho lābhā lobho pavaḍḍhati |

dom1asakayaṃ kajjaṃ koḍīevi na niṭṭhiyaṃ || 17 ||

（獲得物の如くに欲望がある。獲得物の故に欲望は増大する。二マーサの金でできることがらが、一千万［マーサの金］でもできなくなる。）

∪––– | ∪––– | –––– | ∪–∪∪

––∪ | ∪––– | –––∪ | ∪–∪–

本章の中で唯一の古アールヤーでない詩節である。ヴァクトラであるが、パーダcに初めに音節不足が見られる。ノーマンは注記に "Charpentier points out that it is identical with verse 299 of the nijjutti" と述べ、そこからの混入であるから、本章の聖典本文からは削除すべきであるとする。Śsの引くnijjuttiではそれは299番ではなく、256番である。正書法とkoḍievi が異なるだけであるが、とりあえず引用しておく。

jahā lāho tahā loho, lāhā loho pavaḍḍhati |

domāsakayaṃ kajjaṃ, koḍievi na niṭṭhiyaṃ || 256 ||

Ncはnijjuttiとしての通し番号はつけていないが、この詩節を引いている（125r13 = 83c13）。

jahā lābho tahā lobho, lābhā lobho pavaḍḍhai |

domāsakayaṃ kajjaṃ, koḍīe vi na niṭṭhiyaṃ ||

ノーマンは本来の聖典本文ではないとしながらも、韻律正常化の試みを施す。

jahā lāho tahā loho / lāhā loho pavaḍḍhaī

domāseṇa kayaṃ kajjaṃ / koḍīe vi na niṭṭhiyaṃ

∪––– | ∪––– | –––– | ∪–∪–

–––∪ | ∪––– | –––∪ | ∪–∪–

Śs Ncともにpavaḍḍhatiであるが、ノーマンの使用した他の資料にはpavaḍḍhaīの読みが与えられているらしく、ノーマンはこれを採用する。しかし行末の音節の長短は韻律上問題にならないので、何故最終音節が長母音になっているのか解明されないかぎり、この破格形は採用すべきではない。古アールヤーの中に混入されたヴァクトラ詩節のscanを誤った後代のエディター達が不必要な長音化を施したのであろう。

パーダcの音節不足解消のためにすべての証拠に反して、合成語を分解して音節を増やしている。Śsは "dvābhyāṃ -- dvisaṅkhyābhyāṃ māṣābhyāṃ", Ncは "dvābhyāṃ māṣābhyāṃ" と註していて両数にしている。上に引いたようにnijjuttiの段階で既に音節不足であるが、それが聖典本文に混入したのであれば、その段階でも音節不足であったわけだから、聖典本文の読みとして合成語を分解するいわれはない。このあたり韻律正常化の操作がどの段階を志向しているのか明かにしないと、単に字句をいじくり回しているだけのことになってしまう恐れがある。

no rakkhasīsu gijjhejjā gaṃḍavacchāsu ṇegacittāsu |

jāo purisaṃ palobhittā khellaṃti jahā va dāsehiṃ || 18 ||

(隆起した胸にて多様な心を持つ鬼女に貪欲であってはならない。それは人を誘惑し、奴隷の様に弄ぶ。)

–– | ∪–∪ | –– | –,–∪ | –– | ∪–∪ | –– | ∪

––∪ | ∪–∪ | –– | –,– | –∪ | ∪–∪ | –– | –

1行目の第4ガナと2行目の第1第5ガナに問題がある。

no rakkhasīsu gijjhejjā / gaṃḍa-vacchāsu 'nega-cittāsu

jāŏ purisaṃ palobhittā / khellantī jahā va dāsehiṃ

–– | ∪–∪ | –– | –,–∪ | –– | ∪–∪ | –– | ∪

–∪∪ | ∪–∪ | –– | –,– | –– | ∪–∪ | –– | –

ノーマンは第4ガナの過剰モーラを認め、2行目に関しては二つの語の語末を一方は短くし(jāŏ)、もう一方は長くする（khellantī）ことでモーラ数を調整している。

なお最後の単語の具格形に用法については、A.M. Ghatage, *Introduction to Ardha-Māgadhī* (Kolharpur: School & College Book-stall, 1941), § 360 = p.170に本パーダが引かれ、sociativeであると説明されている。

nārīsu no pagijjhijjā itthīvippajahe aṇagāre |

dhammaṃ ca pesalaṃ ṇaccā tattha ṭhavejja bhikkhu appāṇaṃ || 19 ||

（女性に貪欲であってはならない。家なき者は女性を諦めるべきである。美しい教えを知って、修行者はそこに自己を確立せよ。）

−− | ∪−∪ | −− | −,− | −−∪ | ∪−∪ | ∪− | −

−− | ∪−∪ | −− | −,− | ∪∪− | ∪−∪ | −− | −

1行目の第5第7ガナに問題がある。

nārīsu nôpagijjhejjā / itthī vipajahe aṇāgāre

dhammaṃ ca pesalaṃ naccā / tattha ṭhavejja bhikkhu appāṇaṃ

−− | ∪−∪ | −− | −,− | −∪∪ | ∪−∪ | −− | −

−− | ∪−∪ | −− | −,− | −− | ∪−∪ | −− | −

Śs Nc共に2番目と3番目の単語は分書し、動詞はpragṛdhyetと理解している。ノーマンはこれらを連結しているので、upa-gṛdh- を想定していることになる。Candra, *Pkt-Hind K*にはpagijjhaはあるが、upagijjha / uvagijjhaは立項されていない。noは強い否定辞だが、韻律の理由でnaの替わりに選ばれたものであろう。Śsは注釈文中ではitthī viºと分書しているので、聖典本文の連結は単に印刷のミスであろう。itthīは対格複数である。過剰モーラ解消のためにノーマンはすべての証拠に反して-pp-を単一子音に変更している。これはノーマンの第1詩節の注記に述べられているのと同じ手法であるが、慎重を要する。Śs Nc共にvippajaheをviprajahyātと願望法に理解している。第7ガナのモーラ不足のためにノーマンはaṇāgāreの読みを採択しているが、これには証拠があるらしい。ただしCandraではaṇāgāra [anākāra]とある。

2行目は何の問題もない。ノーマンはすべての証拠bhikkhūに反してbhikkhuとしたとあるが、Śs にアテストされているので問題はない。単複は動詞名詞の形の上からでは確言できないが、全体の流れからして主格単数であろう。なおṭhavejjaと語尾が短くなっているのは韻律の要求である。

ii esa dhamme akkhāe kavileṇaṃ ca visuddhapaṇṇeṇaṃ |

tarihiṃti je u kāhiṃti tehiṃ ārāhiyā duve logu || 20 || ttibemi

（以上の如くにこの教えが、清浄な知恵を持つカヴィラによって説かれた。［この教えを］実行する者は［輪廻世界を］渡るだろう。彼等により二世界が獲得される。と私は言う。）

∪∪− | ∪−− | −− | −,∪∪ | −−∪ | ∪−∪ | −− | −

∪∪− | ∪−∪ | −− | ∪,−− | −− | ∪−∪ | −− | ∪

1行目第2第5ガナ2行目第4ガナに過剰モーラが見られる。

ii esa dhammĕ akkhāe / Kavileṇaṃ visuddha-paṇṇeṇaṃ

tarihinti je u kāhanti / tehim ārāhiyā duve loga' tti bemi

∪∪– | ∪–∪ | –– | –,∪∪ | –– | ∪–∪ | –– | –
∪∪– | ∪–∪ | –– | ∪,–∪ | –– | ∪–∪ | –– | ∪
ĕと短母音に読むことでの第2ガナの正常化は認められる。ノーマンはcaがすべてのエディションにあれば留めてKavileṇa ca「カピラによっても説かれた」と読む提案をしながらも、Ncの "caḥ pūraṇe" という註のために聖典本文からは省略してしまった。Śsも全く同じ註を与えている。註釈者達には古アールヤーの概念はなかったので、韻律に関わる註釈は顧慮しなくてよい筈である。そもそも韻律のみならず伝統的註釈の立場を超克するのがアルスドルフ以来の基本的方針であるのに、ここで土着註を根拠に一語削除するのは奇妙である。

2行目第4ガナの過剰モーラはアヌスヴァーラをすべての証拠に反してmに読み替えることで解決している。第4ガナの過剰モーラはわりと認めてはいるが、休止直後のspondee (––)は認めがたい様である。ただしそのことは明記はされていない。ノーマンはCritical Apparatusに記してはいないが、Ncはkāhiṃtiである。おそらくはノーマンの本文がkāhintiのミスプリントなのであろう。山崎博士はテクスト本文ではノーマンと同じくkāhantiとするが、注記ではkāhintiの読みを前提としておられる。ノーマンは注記で最終語に両数の痕跡を認めながら、Ncの読みを採用しなかった。Śs Ncにみられるloguの方が明らかに古い読みである。対応関係はlokau > logo > logu (before *tti*). 山崎博士は両数の用例を更に追加している。更に山崎守一「中期印度アリアン語における両数形について」『印佛研』28-1 (1979.12), 148-149をも参照。

今後に残る問題点

古アールヤーでネックとなるのは第4ガナであるが、Śsの伝える聖典本文をいじらずに残る不正規形は次の様になる。

モーラ不足：

| ,– | 1ab

| ∪,– | 4ab, 7cd

モーラ過剰：

| ∪–,–– | 1cd

| –,–∪ | 2cd, 12ab

| –,∪∪– | 3ab

その他のガナのモーラ不足

| ∪– | 9c, 9d, 19b

その他のガナのモーラ過剰

| ––∪ | 5b, 10d. 19b, 20b

| ∪–– | 11b

| –∪– | 6a

以上のうち比較的出現頻度の高い | −−∪ | はそれぞれわりと簡単な操作で不正規形を解消できることが多い。その他は散発的な出現であるが、どこにもアテストされない形までを導入して解消すべきかどうかは疑問である。意味と韻律の要求されるところに出現する語彙リストを更に増加して確証を得るまでは、聖典本文の変更には躊躇われるものがある。

なお長母音／短母音に関する次のものは認めてよいと思われる。

末尾の長音化　-ī：4d, 18d

短母音 ĕ ŏ：7a, 8d, 9c, 11c, 18c, 20a

-hiṃ > -hi, 7d, 10b

-hiṃ > -him, 13d evaṃ > evam 13cd

鼻音の変更についてはもし何らかの証拠に支持されればよいが、近代の刊本が根拠というのであれば、いまひとつ慎重にすべきである。

アヌスヴァーラを脱落させ、直前の母音を鼻母音と見なすのは1モーラ減らすには便利であるが、このうちãという便法は今日では疑われている。cf. Pind, *WZKS* 38 (2004), 167.

以上見た如く、聖典本文を変更して韻律のスキームに合わせる作業は魅力的でもあるが、また一方で伝承から逸脱する恐れを伴う両刃の剣である。最古の註釈者達は聖典製作時から比べれば、ずっと後代になるし、またおおもとの理解から乖離している可能性はある。しかしその間のギャップを埋めるのに韻律のスキームはそれ程有力ではない。というのも聖典の作者達が、近代の研究者達と全く同一の韻律観を持っていたという保証はない。とりわけ古アールヤーは土着韻律論書に記されているものではないので、帰納的に観察すべきものであって、演繹的に利用してはならないからである。今日の本文批判の趨勢は、実際に伝承されているものを認めるところに基盤を置いているから、過度のスペキュレーションは単なるphilologische Spielereiに堕する危険がある。

註

(1) 研究史については、Walther Schubring, *The Doctrine of the Jainas: Described after the Old Sources*, tr. by Wolfgang Beurlen, 2nd rev. ed. (= Lala Sundarlal Jain Research Series 15) (Delhi: Motilal Banarsidass, 2000)の第I章を参照。なお本書がドイツ語原書でなく英語訳新版が用いられる理由については、同書に付せられたW. Bollée の前書きに記されている。

(2) John Jacob Meyer, *Hindu Tales* (London: Luzac, 1909).

(3) 山崎博士の執筆段階ではノーマン論文は刊行されていなかった。それでその原稿に基づきノーマンから教示を仰いだとのことである。ノーマン教授に親しく師事された山崎博士はノーマン論文のもっとも良き理解者であった。

(4) アルスドルフのアールヤーに関する業績には以下のものがある："Bemerkungen zu einem metrischen Fragment des Mahāparinirvāṇasūtra," *Zeitschrift der deutschen morgenländischen Gesellschaft* 105

(1955), 327-330 = KSch 266-269; "The Story of Citta and Sambhūta," in *Felicitation Volume presented to Prof. S.K. Belvalkar* (Benares, 1957), 202-208 = KSch 186-192; *The Āryā Stanzas of the Uttarajjhāyā: Contributions to the Text History and Interpretation of a Canonical Jaina Text* (= Akad. d. Wiss. u. d. Lit. Abh. Geistes- und Sozialwissenschaftliche Kl. Jg. 1966, Nr.2); "Āryā Stanzas in the Thera-Therī-Gāthā," in the second edition of *The Thera- and Therî-Gâthâ* (London: PTS, 1966), 233-250; *Die Āryā-Strophen des Pali-Kanons. Metrischh hergestellt und text-geschichtlich untersucht* (= Akad. d. Wiss. u. d. Lit. Abh. Geistes- und Sozialwissenschaftliche Kl. Jg. 1967, Nr.4); "Verkannte Mahāvastu-Strophen," *Wiener Zeitschrift für die Kunde Süd- und Ostasiens* 12/13 (1968/69)[Fs. E. Frauwallner], 13-22 = KSch 370-379.

(5) 原文は "even the oldest and best commentators are completely unreliable" であるが、いくら何でもアルスドルフの意図ではなかろう。本来は「常に信用できるとは限らない」と部分否定で表現するつもりではなかったであろうか。我々は聖典解釈に伝統的注釈書の参照を怠ることはできないし、またたとえ聖典の本義から外れているとしても、伝承されていることがらの理解には不可欠のものでもあるからである。

(6) L. Alsdorf, "Uttarajjhāyā Studies," *Indo-Iranian Journal* 6 (1962), 110-111 = KSch 225-226.

(7) アルスドルフも初期の論文では見ていない。後代の論文では言明されていないので不明である。

(8) 山崎博士も和訳を呈示しておられるが、ノーマン／山崎校訂テクストに基づくものであるので、拙訳と相違している箇所があるのは底本にしている本文が異なるためである。